

クリスマス、おめでとうございます。牧師在任中は、クリスマスは集会と行事が続いて忙しかった。隠退してからはクリスマスを、静かに迎え、穏やかに過ごしている。殊に、コロナ禍に襲われた、ここ2年くらいは、寂しいくらいである。

私たち夫婦は、横浜本郷台教会に通っている。コロナの感染が拡大するようになって、礼拝出席も、特別な礼拝日に行くくらいにしている。礼拝出席者が十数人なので、密ではない。受付に消毒液が用意され、皆、マスクをして、感染には気を付けている。従来通りの礼拝を守っているが、賛美歌など、声を出しての礼拝ができず、礼拝に出席したような気持ちになれず、満たされない感じがする。ユーチューブでの礼拝配信があるが、パソコンの前での礼拝も、何だか落ち着かない。

今年のクリスマス礼拝は、佐野匡牧師がヨハネ福音書1章1節～14節までから『キリストの降誕』と題して説教された。聖書において、最初に書かれた50年代のパウロの手紙では、キリストの降誕について、「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました」と書いているだけである。福音書の中で、最初に書かれた70年代のマルコ福音書は、キリストの降誕については触れていない。80年代以降のマタイ、ルカ福音書にキリストの降誕物語が、ようやく書かれている。最後に書かれた90年代のヨハネ福音書には、キリストの降誕を神学的に論述している。

「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった」と格調高く、書き始めている。言は「ロゴス」というギリシア語で、ギリシア人が至高の価値とした概念であり、また、言はイスラエル人が「神の言葉による創造」を信じたように、イスラエル人には最高の憧れであった。ギリシア人にも、イスラエル人にも届くように錬られた記述である。著者はその「言」という言葉を用い、「言」こそがキリストであると展開している。キリストは初めからおられ、神と共にあり、神ご自身であった。この言・キリストに「命」があった。命は永遠の命であり、命は人間を照らす「光」であった。光は、人間の歩む道を照らしてくださる。神を拒否する暗闇は光を理解しなかったが、光は暗闇の中で燦然と輝いている。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

「宿る」とはテントを張って留まるということで、神ご自身であるキリストは、人間の中に留まり、命を与え、光となって導いてくださる。キリストの降誕はインマヌエル（神は我々と共におられる）の実現である。佐野牧師は、このキリスト降誕は昔の出来事ではなく、今の私たちに起こっている現実である。この恵みの出来事を受け入れ、感謝するのがクリスマスであると括られた。

また、去年はコロナ禍でできなかったが、今年は、息子の家族を招いてクリスマスを喜び、祝うパーティーをした。私は、家族が皆キリストを信じ、キリストの祝福に与り、それぞれ、意味のある人生に導かれるように祈った。また、諸教会が福音を力強く宣教し、世界にキリストの平和が来るように祈った。妻は、ターキーの丸焼き料理を作った。いつになく、豪勢であった。キリストは、人から排除された家畜小屋で、お生まれになられた。暗く、寒い場所で、命を受け、光輝く場とされた。まさに、暗闇を照らす、神の救いを示された。我が家のささやかなパーティーにもキリストはお出でくださっている。2年ぶりの賑やかで、楽しいクリスマスを感謝した。